

風のように

甘木教会



主任牧師：白川道生

牧会委嘱牧師：竹田孝一

8 主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。 9 そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。 10 ごく小さな事に忠実な者は、大きな事にも忠実である。ごく小さな事に不忠実な者は、大きな事にも不忠実である。 11 だから、不正にまみれた富について忠実でなければ、だれがあなたがたに本当に価値あるものを任せるだろうか。 12 また、他人のものについて忠実でなければ、だれがあなたがたのものを与えてくれるだろうか。 13 どんな召し使いも二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を軽んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」

ルカによる福音書 16：8～13

【説教要旨】

この聖書の箇所はあきらかに 1 節から 9 節の「不正な管理のたとえ」と 10 節から 13 節の「富に対する態度」という具合に分かれている。

そして、この箇所は理解しがたいことです。なぜ、犯罪をおこした管理人が、「主人はこの抜け目のないやり方をほめた。」とあるようにほめられるのかということです。

これを解釈したエレミヤスは次のように言います。「この男は利口だった、つまり彼は危機的状況を把握したのである。彼は事態を成り行きに任せないで、切迫した禍がその身にふりか

かる前の最後の瞬間に行動した。確かに彼は非良心的な詐欺師である。そのことについてイエスは弁護されない。しかしそれはこの場合問題ではない。支配人が大胆に、決断的に、賢く行動して、新しく生活への活路を切り開いたことが重要である。賢くあることが、あなたがたにとって時間の要請である。すべてが危機にさらされている。」

イエスさまはこの喩えを通して、私たちに対して、自分が置かれているところ、立場が危機の中にあるのだという深い自覚です。私たちキリスト者はいつも危機の中にあるという深い自覚をもつ者であるということです。しかし、社会がもっているような危機的状況とは違い、自分が神の前においていかに罪あるものであり、この危機的状況に目覚め、新しく生活への活路を切り開くことが重要であるかということです。

それが後半の結びである言葉になるのです。「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」というお言葉です。

現代社会をみるとき、世にあって管理人とされている私たちはいかに不正を働いているか。まさに危機的状況が地球規模にあるかということです。そして、いかに人が思想や、物質において縛られ、硬直し、そして逆に自己中を拡大化し神のようにふるまい危機的状況にいることを気づくことだと思います。本来は、賢く振舞わなければならないのが、危機を感じつつ、なおその壁の大きさの前に佇んでいるのかもしれない。

そのとき、「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」という言葉が響いてくるのです。

現代社会は確かに、経済的にも大変化し、危機にあります。そこからくる希望喪失の闇があります。私たちには与えられた現代科学が可能にした人間の能力の拡大も、発展も、しかし、それらが神の与えた限界と相対的なものであり、かつ神の人間への恵みであるということを本当の意味で知る、まさに絶対者なる神に心を向けていけていない人間のいつも持つ危機ではないかと思うのです。

世界を動かすものは、「力を捨てよ、知れ、わたしの神」であ

るということを知ることです。神の言葉を聴くことこそ、私たちを賢くし、人は理性的に、賢く聞き取っているかどうかということをはっきりとしめされます。

それぞれが到達した論理、経験、美、道徳、技術、経済政治、いずれも究極的なものではないのです。つねに危機的状况にあって、賢く振舞わなければ身をつぶすのです。これを知るのは究極的なもの「力を捨てよ、知れ、わたしの神」、「神」を知ってこそすべてが見えてくるのです。

管理人である私たちが大胆に、決断的に、賢く行動して、新しく生活への活路を切り開かなければならない。賢くあることが、あなたがたにとって時間の要請である。すべてが危機にさらされている。こういうことを今、このイエス様の喩えを通して私たちに語られているのではないのでしょうか。

それはイエスさまの「あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。」というお言葉そのものです。

現代の危機を生きるとき、私たちは賢く、世を生きつつ、別の視点、イエス・キリストの目をかりて世をみるとき、この管理者のように危機的状况を把握し、事態を成り行きに任せないで、切迫した禍がその身にふりかかる前の最後の瞬間に行動する危機管理の力を神さまは私たちに与えられています。この不正な管理人がお返しできない神の恵みの内にあって、私たちがいるということを私たちは気づき、本当の意味での危機を乗り越えていきましょう。同時に不正の管理人が結果的には、人を助けたように私たちの業がそのようになるよう祈っていきましょう。神は恵み深い方です。たとえ彼は財が減っても知恵をつくし、人を助けるとき、「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた。この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言うておくが、不正にまみれた富で友達を作りなさい。そうしておけば、金がなくなったとき、あなたがたは永遠の住まいに迎え入れてもらえる。」という私たちが思いもよらぬ言葉をくださいます。

牧師室の小窓からのぞいてみると



今の時代、強い者、国、経済力がある者、国が世界を支配する状況が続いています。

歴史学者・ユヴァル・ノア・ハラリ氏は、「多くの人が経済的価値や政治力を失い、；無用階級；が生まれ、さらにバイオテクノロジーの発展は生物的不平等を生むだろう」と言っています。習近平、金正恩、プーチンさんが抗日戦勝 80 年で、「不死」について話したという嘘のような話が飛び交っています。

ハラリ氏が言う「生物的不平等を生む」という不安を示すことかもしれません。

しかし、私はこういう話を聞くと、「バベルの塔」の物語を思い出します。「主は降って来て、人の子らが建てた、塔のある町を見て、言われた」。そして人々を散らしたとあります。

近々、神はやってきて、この世界を壊すことが近づいていると思う。だから、私たちは「たとえ明日が終わろうと、み言葉に聞く」という姿勢を崩していけないのではないだろうか。

園長・瞑想？迷走記



多様性、多（他）文化の保育とは、キリスト教主義幼稚園として、相応しい教育・保育であるのは間違いないと思う。また、多様性、多（他）文化を幼児期に経験することは、将来において子どもの成長を大きく変化させ、大きく心を広げていくものだと思う。

しかし、この多様性、多（他）文化は、保育者にとって、養成校で学んでこなかったし、毎日が、初めての体験で、暗中模索である。うまくいくときもあるし、失敗するときもある。そんなとき園長は、保育者を信じて、保育者と笑って過ごすことだと思う。明日もやるぞという気持ちを萎えさせないことだ。金曜日、私の好きなケーキ屋でシュークリームを買って、少しでも疲れを取っていただいた。園長の仕事は週末、ケーキ屋に行くことかもしれない。

日毎の糧



聖書：主はみ座を高く置き、なお、低く下って天と地をご覧になる。

主は、弱い者を塵の中から起こし、乏しい者を芥の中から高く上げ、詩編 113：6-7



ルター言葉から

神のみが、このように低いところ、苦難と困窮の中に目を止めて顧みてくださり、どん底にいる人々と共にいてくださるのである。『慰めと励ましの言葉 マルティン・ルターによる一日一生』湯

川郁子訳 徳善義和監修 教文館

低きに降る神

「本詩は、このように天上に君臨する『高き神』であるヤハウエが地上に目をそそぎ、苦難にあえぐ者に手を差し伸べる。『低き神』であることを示す。それが『ヤハウエの僕たち』にヤハウエへの讃美を促す根拠であった。本詩とほぼ同じ詩句ではじまる詩篇 135 篇と本詩を並べてみると、両者の視座の相違が鮮明になる。135 篇が、イスラエルに救いをもたらし、エルサレム神殿に着座する神ヤハウエへの讃美を会衆と祭司たちに促すという意味で、イスラエル中心主義を前面に掲げるのに対して『天をこえて高く』ありながら『自らを低くして』地上の苦しむ者たちに手を差し伸べる神ヤハウエを讃える本詩には、民族中心主義をこえる普遍的な視座が萌している。（詩編の思想と信仰Ⅴ 月本照男 新教出版）」とあり、月本氏は、「地上の諸民族を治める神は弱小の民を選び、これを地上における神の意思の担い手とする。弱小の民を選ぶ神は富者でなく貧者に、強者でなく弱者に手を差し伸べる神である。世界を支配する唯一絶対の神は、高みにおいて超然とする神ではない。地上に苦しむ者たちを救いへと導く『小さき神である』。」と言う。現代の時代だからこそこの神の姿を私たちは心に刻み込んで信仰を貫きましょう。

祈り：力ある者が正義さえ消し去ろうと苦しむ世界にあなたが降って救いをくださる希望をもって歩めますように。

甘木通信

コヘレトから「若い時に造り主を覚えよ」

1000円の無人古本屋にいくと、つい私の好きな小説家・重松清さんの本に手を出す。



2023年出版した「カモナ マイハウス」という空き家をめぐる家族の泣き笑いの優しい物語である。こんなぎすぎすしている時代に清涼感を与える一冊の本である。

奥さんが子どもをめぐって主人公の夫に言う一文。「あなたは、あの子のことをたくさん心配してくれるけど、あまり信じてあげないよね一つ」

この言葉には、ぐさっときた。二人の子どもはもう40歳、38歳になった。今も相変わらずこの子らのことが気になると同時にこの子らの子育てはこの子たちにとって本当に良かったのか自分に問い続けている。父親として、この子たちを信じて接していただろうか。

私の心の深いところにどこか人を信じきれない心がある。もし、若い時、いや、生まれた時からイエス・キリストと出会っていたら、イエス・キリストに愛されていることを五感で感じていたら、もっとこの子らを信じる事が出来るのではないかと思うことがある。

長男はとってもこちらが近づき難い人格者になった。我が子と思えない。次男とは今だに苦手である。対話もとだえる。二人は幼児洗礼を受けた。神の愛の内に信じる人となってくれているだろう。

「若き日に、あなたの造り主を心に刻め 災いの日々が来て 『私には喜びがない』というよわいに 近づかないうちに。コヘレト12：1－2」

(甘木日記)土) 明日の礼拝が行えるように用心をして、体を休める。日) 無事に礼拝を終えて、久しぶりに東京から帰省した青年と昼食。体調も良く、詩篇の聖書解釈に取り組む。月) 休日。火) 礼拝になじめない子、我が儘で礼拝に出ない子、子どもには子どもの論理があるはずと思う。水) 職員会議後、帰宅間際に近くに雷が落ちる。木) 松崎保育園で聖書の学び、午後から大学病院でMRI、血液検査。入院か否かは2週間後に延びる。金) 体力回復の為に幼稚園まで歩いていく。誕生会。

おまけ・牧師のぐち（続日記）牧師だって神さまの前でぐちります。
ぐちらない聖人（牧師）もいます。



土）平熱におさまるが、もし、熱が出たらと思うと自重。日）平熱で、体調も良く嬉しい朝となった。朝も久留米―甘木を信徒さんの車で迎え、送りをいただく。礼拝に備える。芙蓉の花が美しい。帰省した青年と一緒に昼食する。A 牧師

が、**（真向いあの空き家の芙蓉の花）**引退だと聞き、時代の流れを感じた。時はあつという間である。三河地区で30歳代、一緒に伝道の学び、実践と思い出が湧いてくる。体調もよく、詩篇の聖書箇所を解釈。久しぶりの聖書の学び。月）休日を過ごす。体力も落ち、一日中家にいるのも悪いと思い、家内と家の近くの数分で行けるデパートにお見舞いをいただいた方にお返しの品物を買に行き、帰りにスーパーによる。前任地の教会の近くの公園で桜が折れたとニュースで聞き、次男に同じような桜があるので気を付けた方が良いよと電話。知り合いの方に近況の電話。空調が壊れ、買い直すということ、今年は異常気象で、空調は我が家でもフル回転だった。詩篇の解釈をして終わり。火）いつどうなるか分からない体なので、10月の説教、週報の原稿を作る。幼稚園に歩いていったので、夕刻から微熱が続く。来年、引退されるA牧師に電話。礼拝になじめない子の世話、また我が儘で礼拝に出たくない子ども。子どもには子どもの論理、気持ちがあるはずと思う。出たら、出たらで前の子の手をたたく、「〇〇君、痛かったと思うよ。どうして、たたいたのかな。▽▽君がどうして叩いたかという気持ちを教えてくれるかな。」「話さない」「そうか。話してくれる気持ちになったら話して」「いや。絶対話さない。」「園長先生、大嫌い」そんな対話。水）今日はバス通勤。木）午前中は、家内と松崎保育園で聖書の学び、家内が小さな子どもいる職員に手作りのおもちゃをあげる。家内の配慮に感謝。午後から大学病院で血液検査、MRI。入院か否かは2週間後にまた延びる。様子を見るということになった手術なら肝臓の3分の1以上取ることになるので慎重になるは、当然と説明を聞いていた。役員、主管牧師に診断結果を報告。帰りにデパートにより家内の誕生日プレゼントを購入。丹後ちりめんの帽子、鞆を購入。ケチらずにシャツも買えば良かったかもと反省。金）火曜日のようになってはいけませんが、体力回復のために幼稚園まで歩く。最後まで幼稚園に残り**（宮崎宮の放生会）**→
どうにか仕事のできたのが嬉しい。夜も熱が出ず。

